

ゆうかり放送委員会提供
ゆうかりに乾杯
第129回放送の概要（2018年1月27日放送）

パーソナリティ
たろう
（佃 由晃）
なか
（中嶋邦弘）
かりん
（妹尾優香）
あな
（岸本幸恵）



ミキサー
門ちゃん
（門田成延）
会計
小山俊則
相談役
わだかん
（和田幹司）

1. ゲストコーナ（1）兵庫県消防学校 校長 庄慶浩一さん（64 陽会）

長田商店街で生まれた長田育ち。名倉小学校、丸山中学、兵庫高校、関西学院大学法学部。高校から吹奏楽部。中学の時、山本直純「オーケストラがやってきた」を見て楽器をやりたくなった。高校入学時、クラスメートと吹奏楽部を見に行き入部した。フルートを希望したが、すでに女子が入っており、三年生から「チューバどう？」と勧められしぶしぶ担当に。学生時代、音楽は苦では無かったので音符のイメージがつかめた。チューバは一番大きなラップで、椅子の上に置いて抱えて吹く。ベルは天井を向く。三本のピストンは肩のあたり、音は頭の上へ抜けていく。マーチングで使うスーザフォンは、アメリカのマーチ王・スーザが開発したもので、チューバと同じ音域だが、楽器を丸くしてその中に入って行進する。今は樹脂製、元々は真鍮製なので肩に食い込むくらい重かった。

兵庫高校吹奏楽部のメンバーは、1 学年 15 名前、3 学年合わせて 45 人、チューバは各学年 1 人。全体の土台となる音域を担当する。

吉永陽一先生（52 陽会）が指揮者で、先生着任後 3、4 年目に入学した。その頃からコンクールで賞を取れるようになった。その理由は、吉永先生の曲作りがユニークで、ここぞという特定の所を強調された。お客様に受ける表現で審査員からも評判がよく、他校から注目されていた。1 年生の時、県大会第 3 位で、関西大会へ初出場。関西大会も第 3 位となって全国大会初出場を果たした。全国大会への関西からの高校の出場枠は、それまで 1 校だったのが、その年から 2 校に増え、しかも大会が神戸開催ということで 3 校が出場できた。大変幸運だった。全国大会での成績は銀賞受賞だった。

吹奏楽部の練習は毎日。夏休みもコンクールに出場するので休みはほぼ返上。当時は普通の演奏指揮は生徒に任せ、コンクールの合奏練習の時は顧問の先生が指揮していた。5 月の文化祭での発表のほかは、夏のコンクール、12 月の音楽鑑賞会は校外のプロ演奏者が使うようなホールで演奏を行った。神戸市吹奏楽祭は年 2 回あり、何回か出演した。

大学でも吹奏楽部で活動。卒業後は兵庫高校 OB 吹奏楽団で演奏している。毎年3月開催の定期演奏会には 1,000 人のお客様に来ていただいている。バンドにはいつも50～80名が出演している。出来るだけ出演するようにしている。



兵庫県庁に就職。最初は消防防災課（消防防災の事務を担当する部署）、県税事務所（当時は財務事務所）、青少年育成担当（当時はこころ豊かな人づくり推進室）、営繕課（建築設計の担当部署）、消防防災課（当時は消防交通安全課）。以後、ずっと消防防災を担当している。県庁での消防に関わる事務は、国との連絡調整、補助金、表彰（消防吏員、消防団員）、消防組織等に関する統計などを担当した。

一番印象に残った仕事は、平成6年4月1日に再び消防防災主管課に配属され、翌年1月17日に発生した阪神・淡路大震災に遭遇したこと。

現在は兵庫県消防学校に勤務。消防学校は、都道府県に設置される消防職員・消防団員のための教育訓練機関。政令市での設置は任意になっているが、神戸市は独自で設置している。県と市の消防学校で行っている教育訓練は、どちらも国の基準に基づいているのでほぼ同じである。違いは、神戸市消防学校は神戸市の消防職員等のため、県消防学校は神戸市以外の県内市町の消防職員等のための学校である。毎年、採用一年目の職員が受ける初任研修としては、県消防学校では160人前後、神戸市消防学校では30～40人前後の教育訓練を実施している。県消防学校での教官は、県職員4人、各消防本部からの派遣教官（神戸市も含む）9人の計13人で、教官数としては国の定める基準並である。

2. ミュージック：

お送りしている曲は、WMIBA（ワールドミュージックインターネット放送協会）より提供いただいた、サクソプレーヤー米澤美玖さんのアルバム「Landscape」より「Lizard Island」です。



3. ゲストコーナー（2）

震災発生時は名谷団地の職員住宅に住んでいた。大きな揺れで目覚め、周りを確認後、数日間の泊りの覚悟で着替え等を用意して家を出た。地下鉄不通のため、タクシーを呼び止めたが市街地へは出られず、たまたま同じ住宅の職員に出会い、その職員の車で山麓バイパス、鶴越のインターを通り、新神戸まで彼の奥さんに送ってもらった。名谷を7時か8時に出たはずだが、道はまだ混んではいなかった。新神戸からは徒歩で県庁に向かった。

当時の兵庫県でも地域防災計画は作っていた。消防交通安全課の職員とはいえ消防係だったので、防災の専門知識は乏しかった。震災当時の職員数は、消防防災担当20人、交通安全担当9人であったが、震災当日は、6時30分に野口防災係長が一番早く到着し、あと消防係の若い職員が1人来ていた。そして私は消防防災担当職員では3人目の到着であった。私が着いた時、他には、交通安全担当の職員（警察からの派遣）が3～4名来ていた。被害などの情報をとりたいたいと思うが電話がかからなかった。たまにつながっても外線にかけたつもりが内線に繋がる状況で、交換機が壊れたと思った。停電でテレビも映らず、情報がなく時間が進んだ。

組織として動いたのは、6時50分頃、芦尾副知事が駆け付け、地震の規模からの判断で県災害対策本部を7時に設置してから。まもなく貝原知事も登庁し、第1回目の災害対策本部会議が開かれたが、出席できた本部員はわずか。本来本部会議室として使う予定の庁舎12階の様子は、内部の区切りで使っていたロッカーがなぎ倒され、重い金庫が1メートルも動くなど大変な状況であった。通信機器も使えなかった。そのため、普段は県庁の幹部会議で使う5階の庁議室で災害対策本部会議を開催した。苦労しながら、少しずつ情報を収集した。

地域防災計画では水害、震災の担当部署は決まっていたが、職員が揃わなかった。災害時の消防交通安全課の仕事は、被害情報の収集をするとともに、その情報を基に災害対策本部を運営すること。そこでは、幹部が話し合い、被害が大きい地域にどのように救援措置をするか、被害が大きければどこにどのように救援を頼むかを検討し、必要に応じて県外、国に対して支援を求める。しかし震災当日の当初は対応出来る要員がいなかった。2日目、経験者をリストアップして集め、4日目には地方の融通の利く人を集めた。

阪神・淡路大震災の反省点は、情報が集まらない、人が集まらなかったこと。

この経験を基に、兵庫県は5つの教訓をまとめた。

- ①備えの大切さ。特に関西には地震は来ないと皆が信じていた。
- ②初動体制の大切さ。普段の備え。
- ③防災関係機関の相互連携の大切さ。消防、警察、自衛隊との普段からの連携を緊密にしておく。

- ④コミュニティの大切さ。自主防災組織の育成。
- ⑤災害に強い町。耐震性の建物、家具の転倒防止など。

県庁としての対策は、

- ①地域防災計画を見直して、より速攻性を。
- ②県庁の危機管理体制の整備として「防災監」職を全国に先駆けて設置した。ポジションは副知事に次ぐポストで、部長より上位の職なので全庁的な対応調整ができる。
- ③消防交通安全課（20人）が消防課と防災企画課に、そして防災企画局と災害対策局（60～70人）になり職員を増やした。

ハード面では、情報は電話・ファックスでは取れないので、フェニックス防災システムを作った。

県庁本庁、警察機関、出先機関、自衛隊、消防機関などと光回線で瞬時に必要な情報が送受信できるようになった。

兵庫県広域防災拠点ネットワークの形成



震災後、兵庫県は、神戸市に隣接する三木市に広域防災センターを設置した。消防学校はその中核施設。一般県民に対しては防災研修を実施している。防災公園は、陸上競技場、サッカー場、野球場などがあり、災害時の資機材、食料の備蓄もしている。このセンターは、兵庫県全体の物資の集積配送拠点、消防・自衛隊・警察の駐屯拠点となる。県内には、このセンターの他に、西播磨、但馬、淡路、阪神南、丹波の拠点がある。

隣接する国立研究開発法人防災科学研究所の「兵庫耐震工学研究センター」には、実大三次元震動破壊実験施設（Eーディフェンス）があり、県としても防災・減災対策の推進のため連携を密にしている。

広域防災センターでは、一般の方向けに防災体験研修を行っており、起震車で地震体験、訓練施設で水蒸気による煙体験などを行っている。特に、毎年9月から翌年2月にかけて行っている防災リーダー講座（12回開催）は、「防災士」の受験資格が付与されることもあって人気が高い。

本日番組に参加されている防災士の榎崎奈美さんは、12回の講座を受けた後、防災訓練（煙、放水）を受け、地域の防災訓練に参加し、防災関連の専門家をインタビュー後レポートを提出し、終了後防災リーダーの資格を貰った。その後防災士の試験があり、防災士の資格を得た。防災士の活動は地域で活動し、住民の意識を高めることで、中学校区内の訓練参加や、AEDの使い方や学習などの活動をする。

4. こぼれた話こぼれなかった話：「ぼうさい甲子園」入賞した団体の紹介

- (1) 今年13回目の、防災活動に取り組んだ学校や団体を表彰する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」には、全国の130学校・団体から応募があり、小学生、中学生、高校生、大学生の4部門でそれぞれぼうさい大賞（うち1件がグランプリ）や優秀賞、奨励賞が、15学校・団体が選ばれました。
- (2) ぼうさい大賞には、徳島県の阿南市立津乃峰小学校、高知県の高知市立南海中学校、兵庫県立山崎高校、静岡大学教育学部藤井研究室が選ばれ、そのうち、南海トラフ巨大地震に備えた児童による出前授業や地域防災避難マップ作成など活動した津乃峰小学校が受賞、「みんなで助かる津乃峰町をつくろう」活動が評価されました。
- (3) 県立山崎高校は、地域防災マップづくりでの現地調査や高齢者への戸別訪問など、地域とのつながりを大切に活動が認められました。あと、兵庫県内では、県立尼崎小田高校普通科看護医療健康類型の専攻を生かした福祉避難所活動が評価されて奨励賞を受賞。
- (4) 以上の部門賞のほか、他の被災地域の経験教訓を生かした「はばタン賞」、安心安全なまちづくりを目指した活動の「だいじょうぶ賞」、津波避難訓練などの「津波ぼうさい賞」、防災教育活動の「教科アイデア賞」、初応募の優れた取り組みの「フロンティア賞」、継続的な取り組みへ「継続こそ力賞」として、18学校団体が受賞しました。
- (5) 昔と比べて、全国各地域の災害対策へのマインドの高まりから応募多くなって、「防災文化」が根付いていくのが感じられますね。

5. 地域瓦版

- (1) たかとりコミュニティセンター所属団体の1つ「多言語センターFACIL」代表の吉富志津代さんが監修した小学生向けの絵本「多文化共生を考えよう、同級生は外国人!？」全三巻が出版されます。各巻2,500円＋税。お問い合わせは、汐文社（ちょうぶんしゃ）電話（03）6862-5200へ。



- (2) 兵庫高校創立110周年記念事業

「記念式典」5月5日（土、祝）12時50分 神戸ポートピアホテル「ポートピアホール」
「記念祝賀会」5月5日（土、祝）17時 神戸ポートピアホテル「大輪田の間」
「武陽スポーツ祭」3月24日（土）9時 兵庫高校グラウンド
「ゆうかり芸術祭」3月25日（日）13時 神戸ポートピアホテル「ポートピアホール」
「ゆうかりフェス」5月27日（日）12時30分 神戸アートビレッジセンター

ゆうかりに乾杯の過去の放送音声と文書化した放送概要は、下記URLで視聴いただけます。

<http://yukari.hyogo.jp/>